

## 中国山東省の婚姻儀礼

中 生 勝 美

## はじめに

漢族は父系の親族組織であり、女性は婚出し、死後は婚家で祀られるべきものである。そこで婚姻儀礼は、女性を生家から切り離し、婚家へ所属させる儀式である。儀礼の過程としては、<sup>(1)</sup>、だいたい分離儀礼・過渡儀礼・統合儀礼の三段階である。そしてこの過程での主要な特徴は、丹念な魔除け・さまざまな出産祈願・花嫁いじめである。

筆者は一九八四年九月から一九八六年四月まで、中国山東省済南市にある山東大学に留学し、いくつかの農村で社会調査をおこなうことができた。<sup>(2)</sup> 本稿ではこの調査資料をもとに、山東農村の婚姻に対する伝統的価値観及びコスモロジーを分析していきたい。<sup>(3)</sup>

## 一 分離儀礼

まず花嫁とその生家との分離であるが、高青県には次のような習俗がある。婚禮の間、花嫁は「炕<sup>カウ</sup>」と呼ばれるオ

ンドルまたはベットから下りてはならない。つまり用足しにもいけないわけである。これは「回門<sup>カウメン</sup>」という婚禮三日の里帰りまで続く。そこで花嫁は、婚禮の一ヶ月前から家事をせずにオンドルの上に座らされ、少しずつ食事を減らして断食をする。そして用足しなどで下りるときには、自分の靴を履いてはならず、必ず兄弟か父の靴を借りて履かなければならなかった。その理由は娘は生家の「風水帯不去」(風水を持って行けない)からだという。そして婚禮三日前からほとんど断食をして婚禮に臨む。これはまさに嫁に出る娘と生家との紐帯を断ち切る儀礼にはかならない。花嫁が婚禮の間、オンドル又はベットに座らされて下られないのは、筆者の調査したどの村にも共通した習俗であった。しかしこの断食の習俗も、地域によって程度の違いがある。<sup>(4)</sup>

そして娘と生家との紐帯を断ち切る最後の儀礼として、花嫁が「花轎<sup>ホウヂヤウ</sup>」(四人で担ぐかこ)に乗って生家を出発する

とき、藁に火をともし、花轎を担いでその上を通したのち、生家の者が水をかけて火を消す儀礼がある。それは「嫁出<sup>(5)</sup>去的<sup>(5)</sup>女、澀<sup>(5)</sup>出<sup>(5)</sup>去<sup>(5)</sup>的水」(嫁に出る娘は、まいた水だ)という諺に基づいておこなうというが、これには二つの意味がある。第一に藁に火をつけて花轎を通すというのは魔除けの意味がある。第二に水をかけて火を消すことが、娘と生家の紐帯を最後に断ち切ることを表象しているのである。

## 二 過渡儀礼

花嫁が花轎に乗って生家から婚家に入るまでに、さまざまな魔除けの儀礼がおこなわれ、これが過渡儀礼の中心になっている。それは花嫁が生家から切り離され、婚家にも結び付けられていないという状態であるので、悪霊が取りつきやすいからと考えられているからである。

また山東農村では、旧暦一二月以降に婚礼を挙げるのによい吉日が続くというので、旧正月前に多くの婚礼がある。しかし旧暦一二月は地獄から悪霊が出てきて地上を徘徊する月でもあるともいわれているので、魔除けは非常に丹念におこなわれた。

まず生家の方で娘に真紅の花嫁衣装を着させ、頭から赤い布の「蒙頭紅<sup>(モントウホン)</sup>」を被せて、花嫁のからだ全体を赤色で包んでしまう。それは悪霊が赤を嫌うと考えられているので、花轎に乗っている花嫁を悪霊から守るためである。淄

博<sup>(ハク)</sup>泉<sup>(セン)</sup>蒲<sup>(フ)</sup>家<sup>(カ)</sup>荘<sup>(ジョウ)</sup>では、花嫁が頭に赤い布を被るのは、行列の途中で花嫁の「八字<sup>(ハツ)</sup>」と合わない男と視線が合うのを防ぐためだといわれていた。

花轎が婚家に到着して爆竹を鳴らすのも、花轎について来た悪霊を追い払うためである。花轎から下りた花嫁は、足を地面に直接着けてはならず、手伝人が赤いじゅうたんをひき、その上を花嫁に歩かせた。そして門の前で花嫁に「火盆<sup>(ヒバシ)</sup>」を跨がせた。これも火による魔除けである。それから花嫁は手伝の男達に担がれて鞍に座らされ、その後中庭まで担がれた。赤いじゅうたんや花嫁を担ぐところなどは、日本の「筵敷き」や「嫁抱き」を彷彿させる。江守五夫教授は日本のこうした儀礼を、加盟儀礼としてではなく「婚家の敷居には嫁にとり危険な悪霊が宿るとの呪術的信仰があり、《嫁抱き》もこの危険から嫁をまもる儀礼であったと解される」(江守 一九八六—二〇八)とされている。筆者の調査では残念ながら中国の敷居についての民俗的観念について聞いていない。しかし花嫁が門を担がれて入ると同時に「紅磚<sup>(ホンセン)</sup>」が置かれ、これが明らかに魔除けの意味があることから、江守教授の見解は山東の習俗にも妥当すると思われる。

## 三 統合儀礼

統合儀礼は花嫁が婚家の門を入るときから始まってい

る。歴城県では、花嫁が門を入る前に鞍に座らせる儀礼、及び門入ってすぐに赤い紙の上に置いた「糕」という菓子<sup>カウ</sup>を踏ませる儀礼があるが、いずれも花嫁を婚家の成員として婚家の繁栄を祈願させていた。

花嫁と婚家の統合過程で注目したのは、婚礼の三日間の夜におこなわれる「闇房」<sup>ナヨクワン</sup>である。第一日目<sup>(9)</sup>が最も賑やかであるというが、手伝人の中で中心的役割をはたす花婿のイトコや、花婿の宗族で同世代、あるいは彼より下の世代の男性が花嫁をからかう習俗である。それも性的なからかいが顕著である<sup>(10)</sup>。もちろん山東農村は所謂「儒教倫理」がゆきとどいており、性に対する倫理は、現在でも非常に厳格である。そこで花嫁が生家との紐帯が切られ、婚家にもまだ統合されていない「境界人」<sup>マージナル・マン</sup>をからかうことに、世代の序列や儒教的性倫理という日常的秩序の逸脱がみられる。

また花嫁の統合過程は、婚家と嫁の生家「娘家」<sup>ニヤウチヤ</sup>との連帯創設の過程でもある。歴城県では結婚第二日目の「回門」<sup>カイモン</sup>が、婚姻儀礼の最後の段階に組み込まれている。これ以降娘家は儀礼的のみならず、日常生活の上でも重要な関係を持った<sup>(11)</sup>。

むすびにかえて

山東農村の婚姻儀礼は、魔除け・出産祈願・嫁いじめを

特徴とする。そして魔除け・嫁いじめが、境界人となる花嫁に対してなされることを明らかにしていった。

では出産祈願をどのように位置付ければよいだろうか。結論から先にいえば、これは魔除けの儀礼に関係している。この点は従来<sup>(12)</sup>の婚姻儀礼の分析で見落とされてきた。従来中国の婚姻儀礼の魔除けに関して、は脆弱な花嫁を守るためだとする見解が一般的であった<sup>(馬 一九八一一九八)</sup>。しかし伝統的觀念として、結婚の目的は嫁を迎えることよりも、跡継ぎを得ることが究極的な目的である。それが出産祈願の儀礼の象徴する価値観といえる。そこで視点をずらして、子供を守る儀礼から説明したい。

歴城県では、子供の出生後六日目と一二日目に、娘家から食べ物の贈り物がある。このときは子供に特別な儀礼をほどこしていない。子供を守る儀礼としては、一ヶ月目の「満月」<sup>マンゲツ</sup>又は百日目に、髪毛を剃り落として外に捨てる儀礼がある。また子供のときだけに呼ばれる「小名」<sup>シヨウナ</sup>「乳名」<sup>ルナ</sup>があるが、特に男の子の名前は、女の子の名前とか奇妙な名前を付ける。それは男の子の名前だと、悪霊がとりついてしまうので、悪霊から男の子を隠すためにこうした名前を付けるのだという。また子供の衣服には帽子・よだれ掛け・膳靴に、龍や虎のデザインが施してある。これも魔除けの意味がある。

こうして大事に育てられていた子供も、もしなにかの病気で死んでしまうようなことになれば、一転してその子供は人間ではなく悪霊だったとみなされ、葬儀も出してもらえない。これは中国各地で見られる習俗で、小さなときに死んでしまった子供は、悪霊かその親が前世で受けた恨みをはらすために生まれてきた何者かであると考えられている。そこでこの子の死体を自らの宗族の墓地へ埋葬せず、その死体を犬に食べさせるところもあった〔Wolf 1974:147〕。筆者の調査した範囲では、子供の死体を祖先の墓地に埋葬しないというだけで、犬に死体を食べさせる習慣は聞かなかった。しかし高青県では多少類似した習俗があった。それは子供が死んだならば、父親がその死体と棍棒を持って畑にいき、「悪霊め、二度と戻ってくるな」と叫びながら棍棒で死体の頭を三回殴りつけ、棍棒の血をズボンの右裾に擦りつけたあとで、死体と棍棒を畑に投げ捨てて家に帰る。母親は死んだ子供が母を想って家に帰って来ないよう、すぐに娘家へ里帰りし、三日間滞在しなければならなかった。

ではこの悪霊がいったいいつ母親のからだに入ってきたのだろうか。その可能性が最も高いのは結婚式である。婚姻儀礼の魔除けは、確かに花嫁を保護することも目的としているが、それよりも悪霊に花嫁のからだの中へ入り込ま

せないこと、つまり健康な跡継ぎを得ることが隠された意味としてあった。

以上で中国山東省の婚姻儀礼の中心要素である出産祈願と魔除けとの関係をたどりながら、婚姻の目的として新たな成員を迎えると同時に、後継者の獲得という目的があったということを再確認したことで本稿を終わりたい。

註

(1) この用語と概念はヘネップの『通過儀礼』によった。しかし山東の婚姻儀礼の過程は、明確にこの三つに分類されるわけではなく、前後重複している。

(2) 本稿で言及した中国山東省の調査地は次の通り。歴城県冷水溝荘（山東大学歴史系高級進修生教学実習）。濰博県蒲家庄（上田信氏とともに濰博県外事処の招待で調査）。高青県（山東大学図書館職員馮国玉女史から聞き取り）。この場をかりて調査に協力していただいた皆様に感謝したい。

(3) 中国は、一九四九年の社会主義革命以来、農村の社会主義化Ⅱ人民公社化、及び文化大革命といった政治的要因によって社会変化が起きている。そこで本稿で取り扱う「伝統的」婚姻儀礼というのは、革命以前におこなわれていた習俗を指す。今日の婚姻儀礼は、かなり簡素化されている。婚姻儀礼の諸要素は、代替するか消滅しているが、儀礼の構造自体に変化は見られない。

(4) 歴城県では高青県ほど厳しい断食はなかった。なぜならば高青県は三日目に回門をするのに対し、歴城県では翌日が回門なので、これほど厳しくはなかったようだ。

(5) 歴城県では、除夜の夕方に魔除けをするため家の前で藁を燃す儀礼があり、悪霊は藁の火に弱いと考えられていた。

(6) 「八字」とは、風水先生が男と女の生まれた年・月・日時をそれぞれ十二支で表わしてその相性を占う。

(7) 現在、歴城県では赤いじゅうたんを敷いて新婚の部屋「洞房」まで入ることはないが、自動車から下りた花嫁を手伝いの男達が行く手を遮り、花嫁をさんざんからかったのちに入り口に椅子を縦に並べて花嫁を担ぎ上げ、その上を股がらせながら中庭まで担いで行く。敷居を自分の足で跨がせない習俗が今でも残っていることに、敷居に対するなんらかの観念があることを予想させる。山東農村の門の敷居は約三〇センチの高さがあり、普段でもその敷居は踏んではならないと言われている。

(8) 参考までに紅磚(レンガ・箸・銅銭を赤い紙で包んだもの)が魔除けの目的があるという高青県の民間伝承を紹介しておこう。

昔ある婚礼で、突然花嫁が二人になってしまった。一人が本物で一人が化け物の「鬼」だろうというので、まわりの者がどちらが本物かと聞き糺しても、二人とも自分が本物だと言い判断がつかない。どうしようもないので、花嫁の母を呼んで花嫁の特徴を聞いてみた。母は娘の口

元にほくろがあるはずだというので、見てみると二人ともある。次にへその横にもほくろがあるというので見てみるとやはり二人ともある。そこで周囲のものと相談して化け物をだまそうということになった。手伝人に長い梯子を持って来てこさせ、母に娘は梯子登りが得意だと言わせた。それを聞いた化け物は、本物を押し倒して梯子をかけ上り、自分こそが本物だと言った。皆はあれこそが化け物だということで、梯子を倒して化け物の上にレンガを置き、手足のところに箸を打ち込んで動けないようにした。

(9) 「鞍」は安全の「安」と、そして「糕」が「步步高」(だんだん良くなる)の「高」と同音異義である。

(10) 溜博県蒲家荘で聞いた話だが、閨房でトウモロコシの粒を花嫁の袂から入れて、花婿にそれを取るようにはやしたてたが、花婿が恥ずかしがって取るうとしないので、男達が花嫁の服の中に手をつっこみ胸などを触ったという。この話を他の人に話したところ、それは文化大革命で秩序が乱れたからで、昔は性的なことを言って花婿花嫁を恥ずかしがらせただけで、手出しすることはなかったという人と、昔はもつとひどかったという人がいた。閨房が非常に猥褻な習慣のところもあり「馬 一九八一・一六二」花嫁にたいする性的ないたすらは、伝統的にもあったようである。子供が生まれたときに実家から食料が贈られてくる「送米」の習俗、婚礼・葬儀への参与、旧正月二日の里掃り等。

(12) 分家には、必ず母の兄弟が仲裁・財産分けの立ち会いに  
来る。

参考文献

- 江守五夫 一九八六 『日本の婚姻—その歴史と民俗』 弘文堂  
ヘネップ 綾部恒雄・裕子訳 一九七七 『通過儀礼』 弘文堂  
馬之驪 一九八一 『中国的婚俗』 経世書局印行  
Wolf A, 1974. "Gods, Ghosts, and Ancestors", in Wolf, A.  
(ed.), *Religion and Ritual in Chinese Society*. Stanford  
U.P.

(香港在住・社会人類学)